

日中大学生における交友関係の比較研究(1)

— 質問項目の因子分析による検討 —

A comparison of the friendship of Chinese students and Japanese (1)

— An investigation based upon factor analysis —

王 怡

【問題・目的】

青年期は心身ともに変化の大きい時期である。青年は親との依存的な関係から独立し、アイデンティティの確立は重要な課題となってくる。そのときに重要な役割を果たすのが友人関係である。松井（1990）は青年にとって友人の重要性について、安定化・社会的スキルの学習機能・モデル機能などを上げている。他方対人関係は社会、情報・経済体制、行政機構に大きく影響される（高橋、2001）。友人関係もまたその影響を免れ得ないと考えられる。例えば、日本において、若者の交友関係について、親密で内面を開示するような関係、即ち「内面的友人関係」を避け、表面的に円滑な関係所謂「現代的友人関係」を志向する傾向があると指摘されている（岡田、2007）。また、上野（1994）らは友人との心理距離のとり方を基準とし、友人と心理的距離を大きくとり、同調的な行動を取らないという特徴を持つ個別的交友パターン、友人との距離をとらず、同調的である密着的交友パターン、友人との心理的距離を大きくとろうとしながら、行動的には同調的であろうとする表面的交友パターン、友人と心理的距離をとらないが、同調性が低い独立的交友パターンと若者の交友関係の現状の複雑さを指摘している。それに対して、対人関係におい

て特に人情を重視し、独特な「面子」文化を持つ中国では「自分と相手を分けない」友情（陸、2001）また、長く付き合いたい、頻繁に付き合いたい、友達同士にお互い大目に見たいという付き合い方の特徴も指摘されている（李、2006）。そして、日中の対人関係を比較する視点から、張（1991）は中国の大学生が日本の大学生より同性の友人に対してお互いに尊重して付き合うことができる；親しく心が開くことができるといった感情的な面において優れていると指摘した。

ところで両国の社会経済的な変化は著しく、特に中国では経済の成長、メディア、IT産業の発展及び情報化プロジェクトの推進によって情報環境に大きな変容をもたらしている（林、2006）。そうした背景の下現代中国社会においては高等教育を大衆化教育として提供するようになり、1999年以來、大学の進学率は9%から20%まで（2005年まで）に増加した（楊、2006）。他方日本においても大学への進学率は2005年に50%を超え（文部科学省学校基本調査、2006）た。このように著しく変化しつつある環境は若者に大きな影響を与え、彼らの対人関係にも時代なりの特徴をもたらすだろう。しかし、現代の中国の若者の交友についての研究はまだ少ない一方で、大学生は交友関係に関する悩みは目立つようになっているというのが現状である（王、

2005；桑、2005；廖、2005 など）。

そこで本研究はこれらの研究を踏まえ、両国の大学生の友人関係への認知、行動や、感情、欲求などより範囲広く、包括的に捉え、その類似点及び相違点について検討し、文化および心理的な背景の影響を明らかにすることを目的とする。

【方法】

調査概要：日本では2006年7月に北海道にある大学の大学生247名(男性50名、女性196名；平均年齢20.21歳SD=1.05)中国では2006年10月にハルビン市にある大学の大学生218名(男性68名、女性137名；平均年齢21.10歳SD=.91)を対象とした質問紙調査を行った。

質問項目：先行研究の加藤・高木(1986)、上野(1994)、落合(1996)、鈴木・金光(1998)、小塩(1999)、榎本(2003)、岡田(2005)、藤井(2001)に習い、感情、欲求、行動などより範囲広く友人関係のあり方を表す234項目を集めた。そのうち、感情を表すもの31項目、欲求を表すもの23項目、行動を表すものが26項目であった。これらの項目を2回に渡り指導教官及び心理学を専攻とする大学院生4人でKJ法による項目分類をし、最終的に代表的な意味を表す80項目を選定し、調査を実施した。それぞれ「全く当てはまらない」から「よく当てはまる」まで5段階で回答を求めた。中国語への翻訳プロセスは、日本の大学院に在籍する日本語学習歴6年以上の大学院生5人、日本の大学で教授を務めている中国人教員1人、中国人通訳一人、中国語の教員を務める日本人一人により翻訳と逆翻訳を行い、妥当な表現と認められたものを使用した。

【結果】

1) 共通傾向群と異なる傾向群別の因子分析

日中の類似及び相違点を見出すため、両国の大学生のデータに基づき、各項目の平均値とSDを求め、項目ごとに日中間の平均値についてt検定を行った。その結果有意差が見られなかった項目を、両国において同じ傾向の項目群(共通傾向群)、有意差の見られた項目を異なる傾向の項目群(異なる傾向群)に分けた。共通傾向群は33項目；異なる傾向群は47項目(日本>中国9項目、中国>日本38項目)であった。それぞれの項目群ごとに両国の被調査者を一緒にして主因子法、プロマックス回転で探索的因子分析を行った。負荷量の低い項目(<.30)、共通性の低い項目(<.125)、複数の因子の渡って高い負荷量を示す項目を削除し、同様の因子分析を行った結果、共通傾向群は23項目(感情を表すもの8項目、欲求を表すもの11項目、行動を表すもの4項目であった)、異なる傾向群は39項目が残り(感情を表すもの18項目、欲求を表すもの8項目、行動を表すもの13項目であった)、固有値、スクリープロットや解釈の可能性から共通傾向群は5因子が抽出され(Table 1)、同じ手順で異なる群は6因子が抽出された(Table 2)。まず、共通傾向群において、各因子を構成する項目内容を考慮し、因子順に「回避」「気の置けない時間を過ごしたい」「はっきり伝え合いたい」「一緒にいたい」「一緒に成長したい」と命名した。 α 係数を求めたところ、順に $F1 = .711$ 、 $F2 = .654$ 、 $F3 = .555$ 、 $F4 = .685$ 、 $F5 = .653$ 。次いで、異なる傾向群においては、各因子を構成する項目内容を考慮し、因子順に「相互理解・関与」「対立・葛藤回避」「同調」「依存」「開示」「ライバル」と命名した。 α 係数を求めたところ、順に $F1 = .632$ 、 $F2 = .680$ 、 $F3 = .673$ 、 $F4 = .699$ 、 $F5 = .625$ 、 $F6 = .653$ 。

Table 1 日中共通項目因子分析の結果

質問項目	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5
1 自分の内面に踏み込まれないように気をつける	.649	.018	.154	-.054	.021
10 あまり私のすることに口出ししないでほしい	.553	.162	.050	-.033	-.082
49 友達にはありのままの自分は出せない	.551	-.085	-.073	.080	-.017
36 なるべく本音の話をしないようにしている	.519	-.053	-.162	.091	-.093
20 友達の本心は知らないほうが楽だ	.496	.015	-.052	.023	-.067
6 友達の気持ちに踏み込んでいかないように気をつけている	.463	-.027	.040	.027	.219
13 友達付き合いがわずらわしいと思うことがある	.426	.115	-.010	-.165	.025
40 友達と一緒にいると安心できる	-.018	.593	.005	.200	-.010
45 困っているとき相談に乗る	-.043	.548	.032	-.120	.121
58 友達とは気持ちが通い合っている	-.044	.489	.098	.015	-.135
55 甘えさせてくれる	-.006	.473	-.160	.048	.063
43 私の行動や考えを束縛しない	.109	.427	.210	-.193	-.061
51 友達と一緒に騒ぐ	-.116	.393	-.007	.010	.048
44 楽しい雰囲気になるよう振舞う	.080	.381	-.065	-.039	.010
61 友達が楽しくないと自分まで楽しくなくなる	.179	.360	-.049	-.001	.145
17 友達に私に対して自分の意見をきちんと言ってほしい	-.035	-.032	.681	.166	-.023
9 友達には私の意見をきちんと言いたい	-.052	.008	.590	-.007	-.039
38 友達と少し位傷ついても本当のことを言い合いたい	-.058	.042	.428	-.026	.065
19 友達に甘えすぎない	.265	-.174	.419	.029	.061
18 友達には一緒にいて欲しい	-.045	-.114	.092	.819	.039
34 友達と一緒にいたい	.051	.402	-.045	.501	-.026
64 友達と一緒にいることで私自身を成長させたい	-.050	.047	-.045	.033	.742
63 もっといろいろなことを話し合いたい	.052	.095	.091	.006	.541
寄与率	17.62	23.61	27.44	30.68	33.20
α	.711	.654	.555	.685	.653

因子抽出法：主因子法 回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

共通傾向因子相関行列	F 1	F 2	F 3	F 4
F 1 回避				
F 2 気の置けない時間をすごしたい	-.46			
F 3 はっきりと伝え合いたい	-.42	.44		
F 4 一緒にいたい	-.21	.44	.23	
F 5 一緒に成長したい	-.26	.47	.35	.28

Table 2 日中異なる項目因子分析の結果

質問項目	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5	F 6
70 お互いに不満に思っている点を言い合う	.784	-.225	.040	-.105	.065	.110
46 友達関係は割りとおっさりしている	-.589	.161	.149	-.270	.169	-.024
66 特に用事もないのに電話で長く話をする	.577	-.082	.131	-.076	.074	.021
72 友達のためにならないことは決してしない	.545	.422	.023	-.206	.030	.033
77 自分を犠牲にしても相手に尽くす	.466	.108	.197	.128	.168	-.171
73 もっと、私のことを信頼して欲しい	.434	.136	-.010	.289	-.151	.090
74 もっと私の気持ちを理解して欲しい	.406	.114	.077	.267	-.161	.095
14 お金や大切にしているものを友達に貸す	.361	-.129	.005	.145	-.064	-.199
71 友達が怒っているときになだめる	.354	.238	-.134	.096	.084	-.095
78 失敗は友達とお互いにかばい合う	.352	.109	.000	.330	.058	-.049
30 対立しそうな話題は避けるようにしている	-.152	.526	.140	.081	-.056	.092
47 お互いのプライバシーにたち入らない	-.117	.508	.134	-.231	-.144	.007
79 友達とはなるべく言い合ったり争いごとをしないようにしている	-.065	.491	.011	.268	-.155	.016
29 相手に自分の意見を押し付けられないよう気をつける	-.293	.486	-.163	.070	.230	-.055
52 互いに傷つけないように気をつかう	.046	.472	-.143	.265	-.045	.064
75 自分の感情を悟られないように気をつけている	-.013	.428	.340	-.141	-.093	.026
2 お互いの世界を尊重している	.190	.422	-.313	-.129	.206	.166
65 友達に心配かけないように気をつける	.166	.416	.065	.021	-.071	-.138
7 友達の気持ちに気をつかう	.022	.415	-.060	.129	.208	.012
32 友達の考えを押し付けられているように感じる	.110	.005	.546	-.152	.004	.058
33 友達の考えと自分の考えの区別がつかなくなる	.072	-.114	.518	.187	.055	-.059
54 友達に裏切られるのではと思う	-.277	-.008	.490	.109	.035	.069
48 まじめな話題を避ける	.001	.222	.480	-.140	-.185	-.098
31 友達の頼みを断ることができない	.069	.258	.403	.002	.275	-.073
60 友達が自分の知らない友達と話しているのを見てきびしさを感じる	.023	-.100	.377	.258	.099	.192
62 友達と違うことはしたくない	.257	-.054	.365	.077	-.006	.100
59 友達の考えていることが分からなくなって不安になる	.096	-.050	.325	.293	-.088	.033
11 仲間はずれにされるのが絶対にいやだ	.024	-.046	.026	.536	.175	.059
41 友達と同じような話題を持ちたい	.093	-.026	-.020	.518	.059	.107
80 友達にはなるべくよく思われるように振舞う	.040	.350	-.004	.503	-.189	.092
3 友達からどう見られているか気になる	-.028	.111	.121	.445	.086	.081
22 頼りになる	-.138	.073	.052	.215	.614	-.118
5 自分の性格についての話をする	.081	-.110	.055	-.073	.578	.170
4 自分の趣味についての話をする	.082	.037	-.013	-.131	.517	.183
8 一緒にいて心が安らぐ	.025	-.022	-.020	.210	.480	-.149
76 友達の心の支えになろうとする	.304	.045	.052	.239	.422	-.103
25 友達よりいい学校に行きたい (いい仕事に就きたい)	.056	.021	.021	.072	-.027	.671
23 友達には様々な点で負けたくない	.029	.090	.007	.215	.033	.513
24 友達のほうがテストの点がいいと不安になる	-.336	-.027	.150	.250	.117	.476
累積寄与率	17.25	24.25	29.22	32.54	34.87	36.77
α	.632	.680	.673	.699	.625	.653

因子抽出法：主因子法 回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

異なる傾向因子相関行列	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5
F 1 相互理解・関与					
F 2 気遣い	.49				
F 3 同調	.01	.21			
F 4 依存	.48	.45	.26		
F 5 開示	-.14	-.25	-.24	-.10	
F 6 ライバル	-.01	.09	.40	.16	-.14

2) 各因子に基づく下位尺度による平均値の検討

各因子において、国別、性差を検討するために、共通傾向群、異なる傾向群のそれぞれ各因子を構成する項目の合計点を同名の下位尺度得点とし、国(2)×性(2)を独立変数、各下位尺度得点を従属変数とする2要因分散分析を行った。その結果、まず共通傾向群においてはいずれの因子においても国別の主効果は有意ではなく、これらの下位尺度が「共通傾向群」から得られた下位尺度に基づくものであることが確認された。まず性別の主効果のみが有意であった下位尺度を取り上げよう。「回避」尺度において性別の主効果が有意 ($F(1,448)=7.38, p<.01$ 男性>女性)であった。次に「一緒にいたい」尺度において性別の主効果が有意 ($F(1,448)=4.96, p<.05$ 女性>男性)であった。性別の主効果だけでなく、交互作用も有意であった下位尺度を取り上げると、「気の置けない時間を過ごしたい」尺度では性別の主効果が有意 ($F(1,448)=25.27, p<.01$ 女性>男性)でまた交互作用も有意であったため ($F(1,448)=5.92, p<.05$)、単純主効果の検定を行った。その結果、日本では女性が男性より有意に高

く ($F(1,448)=26.28, p<.01$)、男性の場合中国が日本より有意に高かった ($F(1,448)=6.32, p<.01$)。次に「一緒に成長したい」尺度において性別の主効果が有意 ($F(1,448)=4.84, p<.05$ 女性>男性)で、また交互作用も有意であったため ($F(1,448)=6.83, p<.01$)、単純主効果の検定を行った。その結果、日本では女性が男性より高く ($F(1,448)=10.94, p<.01$)、男性の場合は、中国が日本より高かった ($F(1,448)=6.66, p<.01$)。最後に「はっきりと伝えたい」尺度では性別、交互作用はいずれも有意ではなかった (Table 3)。

次に、異なる傾向群についての、国別×性別の2要因の分散分析の結果では、国別主効果はいずれの下位尺度においても有意であり、これらの下位尺度が「異なる傾向群」から得られた下位尺度に基づくものであることが確認された。「相互理解・関与」尺度において国別の主効果は中国>日本であった ($F(1,448)=438.08, p<.05$)。また性別の主効果が有意 ($F(1,448)=5.42, p<.05$)であり、女性>男性であった。「気遣い」尺度において $F(1,448)=162.81, p<.01$ 中国>日本であった。また、交互作用も有意であったため

Table 3 共通傾向群

	国別	性別	交互作用
F1 回避		$F(1,448)=7.38, p<.01$ 男性>女性	
F2 気の置けない時間を過ごしたい		$F(1,448)=25.27, p<.01$ 女性>男性	$F(1,448)=5.92, p<.05$ 日本： $F(1,448)=25.27, p<.01$ 女性>男性 男性： $F(1,448)=25.27, p<.01$ 中国>日本
F3 はっきりと伝えたい			
F4 一緒にいたい		$F(1,448)=4.96, p<.05$ 女性>男性	
F5 一緒に成長したい		$F(1,448)=4.84, p<.05$ 女性>男性	$F(1,448)=6.83, p<.01$ 日本： $F(1,448)=10.94, p<.01$ 女性>男性 男性： $F(1,448)=6.66, p<.01$ 中国>日本

($F(1,448)=10.78, p<.01$)、単純主効果検定を行った。その結果、日本では女性は男性より高く ($F(1,448)=5.70, p<.05$)、中国では男性は女性より高かった ($F(1,448)=5.08, p<.05$)。また、女性の場合中国は日本より高く $F(1,448)=85.14, p<.01$ 、男性の場合も中国は日本より高い結果であった ($F(1,448)=87.39, p<.01$)。「同調」尺度において国別の主効果は中国>日本であった ($F(1,448)=24.41, p<.01$)。「依存」尺度において国別の主効果は中国>日本であった ($F(1,448)=40.32, p<.01$)。「ライバル」尺度において国別の主効果は中国>日本であった ($F(1,448)=22.12, p<.01$)。「開示」尺度において国別の主効果は日本>中国であった ($F(1,448)=43.45, p<.01$)。また性別の主効果が有意 ($F(1,448)=27.60, p<.01$) であり、女性>男性であった。また、交互作用も有意であったため ($F(1,448)=8.69,$

$p<.01$)、単純主効果の検定を行った。その結果、有意差が見られたのが日本において、女性は男性より高く ($F(1,448)=31.95, p<.01$)、男性の場合は日本のほうが中国より高かった ($F(1,448)=4.51, p<.05$)、女性の場合も日本のほうが中国より高い結果 ($F(1,448)=82.28, p<.01$)であった (Table 4)。

【考察】

まず共通傾向群で抽出された因子について考えてみよう。共通傾向群の項目は日中の大学生の友人関係のあり方において平均値に差がなかったことから、因子を構成する分散は個人間分散によるものと考えられる。まず第一因子の「回避」因子が抽出されたことは、両国の大学生とも友達と付き合う時に心理的距離が近いか遠いかを意識しがちな傾向があ

Table 4 異なる傾向群

	国 別	性 別	交互作用
F1 相互理解・関与	$F(1,448)=438.08, p<.05$ 中国>日本	$F(1,448)=5.42, p<.05$ 女性>男性	
F2 気遣い	$F(1,448)=162.81, p<.01$ 中国>日本		$F(1,448)=10.78, p<.01$ 日本： $F(1,448)=5.70, p<.05$ 女性>男性 中国： $F(1,448)=5.08, p<.05$ 男性>女性 男性： $F(1,448)=87.39, p<.01$ 中国>日本 女性： $F(1,448)=85.14, p<.01$ 中国>日本
F3 同調	$F(1,448)=24.41, p<.01$ 中国>日本		
F4 依存	$F(1,448)=40.32, p<.01$ 中国>日本		
F5 開示	$F(1,448)=43.45, p<.01$ 日本>中国	$F(1,448)=27.60, p<.01$ 女性>男性	$F(1,448)=8.69, p<.01$ 日本： $F(1,448)=31.95, p<.01$ 女性>男性 男性： $F(1,448)=4.51, p<.05$ 日本>中国 女性： $F(1,448)=82.28, p<.01$ 日本>中国
F6 ライバル	$F(1,448)=22.12, p<.01$ 中国>日本		

ることを示していると考えられる。また、下位尺度を性別の視点から見ると、男性がより回避的で、女性が回避的ではないことを示している。これは茂木(1998)が女子に比べて男性は一定の距離を保った上で友人関係を形成することが特徴的であると指摘したように、性別によって友人との距離の感じ方が異なると考えられ、例えばプライバシーが侵害されるような場合、女性はあまり気にしないが、男性は気にするかもしれない。

第2因子の「気の置けない時間を過ごしたい」は、友人と一緒にいることが気持ちの上でリラックスできるかどうか、楽しい時間かどうかに関わる因子であり、そうした意識が日中双方の学生たちにとって重要な点であることが示された。その中では日本の男子学生が下位尺度得点の平均値でやや低い傾向を示し、十分に居心地よさを満喫しているわけではないことが示唆されている。

その一方で、「はっきりと伝えたい」という因子が抽出されたことは、両国において友達と伝え合うかどうかについて意識しがちであることが示唆された。尺度平均値は中央より高い得点のほうへ偏っているため、日本と中国を問わず、現代の青年は相手との心理的距離の遠近を意識してはいるが、その上で自分の意見をきちんと言ったり、言われたりする関係を望む気持ちが読み取れる。この結果は榎木(2003)の青年期の友人関係の概念の一つは相互尊重、理解であると指摘した結果と対応していると考えられる。

また、気持ちの通じ合うことを重視し、楽な時間を過ごしたい、「一緒にいたい」という友達への親和欲求を表す因子も見出され、現代の日中の大学生の友人関係に関わる心理の特徴の一つが友人の渴望(西平, 1981)であるとする見解と一致していると考えられる。また、下位尺度得点を性別の視点から見ると、いずれも男性の方がより低い傾向が見られ、この結果は大学の男子は主に「気の合う仲間」

を作り、女子は「心の友」を作ると言われているように(伊賀, 2003)、女性のほうが男性より友達との相談、助言、評価、情緒的サポートといった心理的な親密さを求める傾向が反映されているといえよう。さらに友達と一緒にいることで自分自身を成長させたい、もっと話し合いたいという因子が抽出され、友達は自分自身の成長と繋がっていくかどうか、またより話をしようとするかどうかについて意識しがちであることが示唆された。尺度得点は平均値より高い得点のほうへ偏っているため、国別に問わず、現代の青年は自立を意識し、積極的に友達と話し合いたい気持ちが伺える。また、性別の視点から見ると、中国の男子大学生より日本の男子大学生の方がより低い傾向が見られた。日本の男子大学生の方が、友人関係の中で自己の成長を求める傾向が低いことが示唆されていると考えられるが、自己の成長を求める欲求そのものが低い可能性も考えられる。但し、「一緒にいたい」「一緒に成長したい」二つの因子は、それぞれ項目数が少なく、 α の値も比較的に低いため、安定した因子かどうかは今後さらに検討する必要があると思われる。

このように、両国において平均値の差のみられなかった共通傾向項目群で抽出された「回避」「気の置けない時間を過ごしたい」「はっきりと伝えたい」「一緒にいたい」「一緒に成長したい」の5因子は日本と中国の大学生において、友人と親しくなりたい、友人と楽しく過ごしたいと同時に、考えや意見をはっきりと伝えたいといった基本的な心理欲求を表しており、日中両国の友人関係に共通する基本的な傾向を示す因子である可能性が示唆されている。

次に、両国において異なる傾向が見られた項目に基づく因子分析結果についてみてみよう。この項目群は各項目の平均値間に日中で有意差が見られたことから、因子を構成する分散は個人間分散によるものだけではなく、

日中間の相違が因子に反映していると考えられる。すなわち、日中間で考え方や感じ方が大きく異なるポイントが、因子として抽出されていると考えることができよう。まず、興味深い点は、日本の平均値が中国より高い項目の殆どが第5の「開示」因子に集中しているという点である。項目の得点の分布を見ると、「頼りになる」「一緒にいて心が安らぐ」「自分の性格についての話をする」「自分の趣味についての話をする」は日本側が平均値より高い得点へと偏っていることが分かった。即ち日本と中国の大学生において、自分を打ち解ける、そして友達の支えになろうとする傾向は異なっていて、日本の大学生の方が中国の大学生より友からサポートが得られると感じ、自分のことを伝えていると感じていると考えられる。性別および国別の要因の中で最も高いのが日本人女性であることから、日本人女性は友達に対して自分の性格や、趣味についてよく話をする、そのとき相手が頼りになると思ったり、自分も相手の支えになろうとしたり、友達から心の安らぎを求めたりする傾向がより強いと伺える。一方で、中国ではこうしたテーマはあまり話題にならない、或いはこのような話をするとき、相手の支えになるとあまり考えないことから両社会のありようの違いが反映している可能性がある。こうした結果は落合・佐藤(1996)が友人関係において、女子のほうがより共感、共鳴しあうというようなことを望むと指摘したことと一致していると考えられる。一方で、中国人は友人を話の相手だというより同盟軍、家族の次に大切である存在とも指摘されたように(陸、2001)、友人と自分の趣味や性格の話をしたりするといった一対一の個人的な関わりは求めない可能性がある。ところで、第1因子である「お互いに不満に思っている点を言い合う」「自分を犠牲にしても相手に尽くす」や「もっと私を理解してほしい」という率直な関与と理解を表す因子においても、

中国のほうが日本の大学生より高い傾向を示していることは、各項目の平均得点はより高い傾向を示したため、さらに中国の大学生が友人に求めているのはより親密的で、情緒的なものであると推測できる。但し、中国の大学生の交友観について、自己中心意識が目立つと指摘されているように(桑、2005; 徐、2006など)、自分のことを信頼してほしい、自分を理解して欲しいなど自分を中心に物事を考える傾向があるため、日本人と比べると、友人への気配りが欠如していることも考えられる。また、性別の視点から見ると、女性は男性より高い傾向が見られ、女性は男性より理解しあい、共感し、お互いが一つになるようなことを望むこと(落合・佐藤、1996 中園・野島、2003)を示していると考えられる。

共通傾向群で抽出された第1因子が、互いの内面に踏み込まずプライバシーを尊重するという意味でのいわば心理的な「回避」因子であったのに対し、この第2因子は友人との直接の対立・葛藤を避けようとする、行動的な「回避」因子である。日本の大学生の付き合い方として「気遣い」(岡田、1993)や「距離を持つ」(松井、1990)などよく言われているが、そうした傾向については日中間で大きな差がない一方、表面切て対立することに対しては、中国の学生の方が、はっきりと回避傾向を示すことによってこの因子が抽出され他と考えられる。ここでは特に高い得点を示したのが中国の男性であることに注目してみた。項目の平均得点を見ると、特に目立つのが「友達に心配をかけないように」「友達の気持ちに気をつかう」「お互いの世界を尊重する」「友達となるべく言い合ったり争いごとをしたりしないように」といった互いのプライバシーを重視し、友達を大事にしている気持ちを表すような項目においてより高い傾向が見られた。但し、中国では人脈が機能している、友情は明らかに人脈の一つであるといわれ(弘兼、2004)、さらに現代中国の大学生の

交友特徴として功利感が高いと指摘されたことから(桑、2005)中国では男子大学生のほうが人脈の一部分である友人関係を大学時代から重視し築こうとしているのかもしれない。

第3の「友達の考えと自分の考えの区別がつかなくなる」「友達に裏切られるのではと思う」といった友人からの影響を受けやすいという意味での被影響性に関する「同調」因子、そして第4の「仲間はずれにされるのが絶対にいやだ」「友達と同じような話題を持ちたい」といった友人への依存感情を表す二つの因子において、中国の大学生が日本より高いのは、友人関係の持つ意味の違いを示している可能性がある。まず、日本人の交友関係について同調や、群れという特徴が指摘されており、友人と円滑な関係を維持しようとする傾向がある(岡田、1993；小野、1994など)といわれ、本研究も「依存」「同調」という友人から嫌われないように他者への配慮や他者への関心を持ち、友人であることを求め、意識するという二つの因子が抽出されたことが先行研究と整合していると考えられる。

一方で中国ではこの二つの因子の下位尺度において、日本より得点が上回ることに興味深い。「友達と同じ話題を持ちたい」「友達によく思われるように振舞う」項目において、項目得点が平均値より高い方へ偏っていることから、中国の大学生は友人を求め、友人に合わせようとする傾向がより強いと伺える。この結果について、前述した中国人の特徴的な付き合い方のほか、彼ら自分の「面子」を保とうとすることも関連していると考えられる。中国ではより社交能力のある人、友達の多い人のことを面子のある人だと考え、羨望的な存在とされている(呉、2005)、よって人にどう見られているか、友達の頼みを断ることができない、友達によく思われたいといった日本と同じく円滑な関係を保とうとする友人との付き合い方をとることは日本と異

なって、自分の面子を維持するために繋がっているのではないかと考えられる。

最後に、「友達に様々な点で負けたくない」「友達よりいい学校に行きたい(仕事に就きたい)」といった「ライバル」意識因子が抽出できたことは友人と比較するかしないかということに意識する傾向が両国の青年が持っていることがいえよう。その中で中国のほうが日本より高い傾向が見られた。さらに項目の平均得点を見ると、日本の大学生はより低い得点へと偏っているのに対して、中国は平均に近い。この結果を「同調」因子と「依存」因子においても中国が高い得点を示したことを合わせて考えると、友達に高い親密度、一体感を求めながら、友達とは競争の相手であることも意識しているのが現代の中国の特徴だといえよう。「一人っ子社会」「学歴社会」という今の中国はますます競争激しい社会となっており、また大学での寮生活による生活の密接的な関わりによって、互いに比較するチャンスがより多くなり、彼らにとって友達を求め、友達は親しい存在である一方で、ライバル意識も感じやすいのではないかと考えられる。この結果も前述した日本の大学生と比べると、あまりお互いに開示しないが、積極的に理解・関与という矛盾に見える行動を解釈できるかもしれない。

まとめてみると、友との相互理解、友への気遣い、開示、依存と同調、ライバル意識といった日中間異なる傾向が見られた感情について、それは日本と中国の現代若者の友人関係において一般的な感情レベルを越え、それぞれの国の典型的な違いを表すものだといえよう。また、性別の視点から見ると、「一緒にいたい」「気の置けない時間を過ごしたい」「一緒に成長したい」「相互理解・関与」「気遣い」「開示」といった女子のほうが男子より有意に高かった因子が多く見られ、女性のほうが男性よりも友人関係のいくつかの側面が活発である(和田、1993；丹野、2007)；言語能力な

どの面において、女性のほうが優勢を有している(魯、1990; 馮、2004)と指摘されたように、女性の友人関係は男性よりも多様な友人関係機能成分を有し、女性の友人関係は多くの機能を果たしていることがいえよう。

謝辞

本論文は2007年度日本社会心理学会第48回にて発表しました。本論文をまとめるあたり、熱心にご指導をくださいました今川 民雄先生に厚く感謝いたします。

参考・引用文献

- 榎木 淳子 2003 青年期の友人関係の発達の变化 — 友人関係における活動・感情・欲求と適応 — 風間書房
- 馮 宗俠 2004 大学生人際交往能力現状調査研究 Journal Beijing of Technology (Social Sciences Edition) Vol. 6 No. 4
- 弘兼 憲史 2004 なぜ「中国式」人間関係が力を持つのか 新講社
- 林 暁光 2006 現代中国のマスメディア・IT革命 明石書店
- 陸 慶和 2001 こんな中国人こんな日本人 関西学院大学出版会
- 駱 風 2005 和谐社会与大学生人際交往水平的提高 — 来自広東高校的調査和思考 — 中国青少年發展論壇 2005
- 魯 潔 1990 教育社会学 北京人民教育出版社 p 524-525
- 廖 志鴻 2005 新形势下大学生人際關係狀況的研究 思想理论教育(上半月綜合版) 上海市科教育系统思想理论教育研究会、上海市教育科学研究院
- 李 年古 2006 日本人に言えない — 中国人の価値観 学生社
- 松井 豊 1990 友人關係の機能 “青年期における友人關係” 社会化の心理学ハンドブック 川島書店 p 283-296
- 毛 新華 2006 中国の若者の人付き合いスタイルについての研究 — 自由記述調査によるカテゴリカルな検討 — 対人社会心理学研究 (6)、p 81-88
- 茂木 洋 1998 現代青年の理解の仕方 辻井正次 編著 第9章 男子青年の友人關係 ナカニシヤ出版
- 中園 尚武・野島 一彦 2003 現代大学生における友人關係への態度に関する研究 — 友人關係に対する「無關心」に注目して — Kyushu University Psychological Research Vol. 4 p 325-334
- 岡田 努 1993 現代青年の友人關係に関する考察 青年心理学研究 5、p 43-55
- 岡田 努 2007 大学生における友人關係の類型と、適応及び自己の諸側面の發達の關連について パーソナリティ研究 第15巻 第2号 135-148
- 落合 良行・佐藤 有耕 1996 青年期における友達との付き合い方の發達的变化 Japanese Journal of Educational Psychology Vol. 44 p 55-65
- 桑 紅青 2005 138位大学生交友觀的調查表明 — 近七成大学生交友重功利 アンプ青年新聞 2版
- 孫 崇勇 2007 大学生人際關係困犹的研究 Health Medicine Research and Practice Vol. 4. No.1
- 高橋 さやか 2001 人間關係 そのあり様をたずねて 新読書社
- 丹野 宏昭 2007 友人との接觸頻度別に見た大学生の友人關係機能 パーソナリティ研究 Vol. 16 No.1 p 110-113
- 上野 行良・上瀬 由美子・松井 豊・福富 護 1994 青年期の交友關係における同調と心理的距離 教育心理学研究、42、p 21-28
- 和田 実 1993 同性友人關係：その性及び性役割タイプによる差異 社会心理学研究、8、p 67-75
- 王 維新 2005 大学生常見心理問題的干予对策 Chinese Journal of Clinical Rehabilitation, Vol.4
- 吳 鉄均・吳 榮先 2005 大学生的面子觀念及在友伴中的相似性 第十届全国心理学学术大会论文摘要集
- 徐 敏 2006 大学生人際交往的常見異常心理与調適 China market Retail Today, Vol.26
- 西平 直喜 1981 青年の世界3 友情・恋愛の探求 大日本図書
- 伊賀 光屋 2003 大学生の友人關係 — 「心の友」と「気の合う仲間」 — 新潟大学教育人間科学部紀要 Vol.6 No.22 p 283-305

- 楊 瑞莉 1984 500名青年工人、大学生交友活動的調査 青年研究 No.5
- 張 日昇 1991 日中青年の友人関係に関する比較研究 ―その発達、及び自己意識との関連― 横浜国立大学教育実践研究指導センター紀要 No.7

[Abstract]

A comparison of the friendship of Chinese students and Japanese (1)

— An investigation based upon factor analysis —

Yi WANG

The present study aim to compare Chinese students and Japanese students with regards to the multiple aspects of friendship. 218 Chinese students and 247 Japanese students completed a questionnaire which contained 80 items related to friendship. 80 items were divided into two groups. One group, designated as “different group”, was constructed by the items which had the significant difference in each item’s mean between Chinese students and Japanese students. The other group, designated as “same group”, was constructed by the items which had the no significant difference. Factor analysis revealed five factors based on “same item” group and six factors based on “different item” group. Eleven sub-scales were constructed and ANOVA was performed on sub-scales by culture and gender. It was concluded that Japanese students were more disclose to their friends than Chinese, where as Chinese students showed higher commitment than Japanese to their friends on other aspects of friendships.

Key words: Chinese and Japanese, university students, friendship questionnaire